

カタコンベにおける原始キリスト教美術のめばえ

前之園 幸一郎

はじめに

イタリアのローマ郊外には多くのカタコンベが散在している。そしてその内部には、稚拙ではあるが重要なメッセージのこめられた初期キリスト教時代のさまざまな象徴的絵画がその壁面を飾っている。例えばキリストその人を象徴するものとして広く知られている「魚」(イクチュス)なども各所に見られる〔図1〕。ギリシア語で魚を意味するイクチュス(ἰχθύς)は、「イエス・クリストス・テウ・ヒュイオス・スオーテール」(Ἰησοῦς Χριστὸς Θεοῦ Υἱὸς Σωτὴρ)、すなわち「救い主、神の子、イエズス、キリスト」の五つのギリシア語単語の最初の文字をつなぎ合わせたものであった¹⁾。その魚の印は、キリスト教徒とその強い信仰を表す符号として大弾圧時代に広く信仰共同体の内部に伝えられた。

同様に、カタコンベの壁面には、ほとぼしる宗教的熱情と深い祈りによって聖霊の象徴としての鳩、不死と復活の象徴としての孔雀、キリスト教信仰を表現する葡萄の木、希望の象徴としての錨などが、所狭しと素朴で荒々しい線で平面的図像に表現されている。

隔月刊の国際的雑誌『聖書の世界』は、1994年に〈弾圧の真実〉と〈カタコンベの謎〉を主な柱とする「ローマ教会の起源―」について特集した²⁾。その趣旨は、カタコンベが大迫害を逃れるための初期キリスト教徒の避難場所であり、かつ集会の場所であったとする従来の説の考古学的成果からの否定にあった。そして、そこではカタコンベが墓地として独自の発展をとげたものであることが明快に跡づけられている。

キリスト教考古学は、19世紀末にジョヴァンニ・バッティスタ・ロッシによって真の科学として確立される。ロッシを中心にして1852年に法王庁宗教考古学委員会(Pontificia Commissione di Archeologia Sacra)が設立された。さらに、1925年には、法王庁キリスト教考古学研究所(Pontificio Istituto di Archeologia Cristiana)が設立され、現在もカタコンベの保存ならびに発掘調査にあたっている。

ローマにおいて一般公開されている主なカタコンベは、サン・カッリスト(San Callisto)、サン・セバスティアノー(San Sebastiano)、ドミティッラ(Domitilla)、プリシッラ(Priscilla)、サンタニューゼ(San'Agnese)である。この他に、非公開のものとしてヴィア・ラティーナのカタコンベ(Catacomba della via Latina)や、プレテスタート(Pretestato)、コッモディッラ(Commodilla)、サンティッシモ・マルチェッリーノ・エ・ピエートロ(SS. Marcellino e Pietro)などのカタコンベが有名である。

本稿では、初期キリスト教徒たちの祈りのなかからどのような宗教的図像が生み出されたか、その図像にはどのような象徴的意味がこめられているか、についての概略をたどることが

基本的な課題とされる。イタリア本国においてもカタコンベの図像に関する研究は未開拓の分野に属しており、参考文献もきわめて限られている。筆者の現地での見学の結果をも踏まえつつ考察をすすめることとする。

I 信仰共同体の発展とカタコンベ

聖パウロが紀元61年ころにナポリ近郊のポッツオリを経てローマにたどり着いたとき、すでに首都ローマにはキリスト教徒の信仰共同体が存在していたことが新約聖書の使徒行伝(28,15)に述べられている。「ローマの兄弟たちは、わたしたちのことを聞いて、アピオ・フォロとトレス・タベルネまで出迎えてくれた。パウロは彼らを見て、神に感謝し、勇気づけられた。」(フランシスコ会訳)

鎖につながれた聖パウロは、兵士たちに護送されながら、犯罪者の囚人たちに交じってローマに到着する。ローマのキリスト教徒たちは、この偉大な使徒に相応しい尊敬をもって歓迎の出迎えを行う。すなわち、信仰共同体の代表は、ローマから50キロも離れたアッピア街道沿いのトレス・タベルネ(Tres Tabernae)まで出迎えのために赴いた。ある者たちは、さらに遠くのアッピア広場(Forum Appii)までも出かけて行ったのである。

ローマのキリスト教教会はいつ成立したのか。その時期を確定することは困難だ。しかしながら、ローマにおけるキリスト教徒の数は、すでに皇帝クラウディウスの時代に著しく増大しつつあった。クラウディウスは、ローマに居住するユダヤ人たちがこの新しい宗教を熱烈に受け入れている状況に対して、その影響力がさらに広がるのを懸念し、紀元50年頃全ユダヤ人をローマから追放する命令を発している³⁾。その事実、「パウロはアテネを去ってコリントへ行った。そこで、アクネというポントス生まれのユダヤ人とその妻プリスキラとに出会った。彼らは、クラウディウス帝が、すべてのユダヤ人はローマから退去するようにと命令したので、最近イタリアから来たのである」(使徒行伝,18,2,フランシスコ会訳)との聖書の記述からもうかがい知ることができる。また、コリントで56-57年の冬に書かれたと推定されるパウロの「ローマ人への手紙」は、当然ながらローマの信仰共同体の兄弟たちの存在を前提にしたものであった⁴⁾。

キリスト教の広まりと教徒の増大は、タキトゥスの『年代記』によれば、ネロによる迫害を生み出すことにもなった。64年7月にローマに不審火による大火災が発生する。それは10日間ちかくも燃え続けて、多数の死者を出し、ローマ市街の大半を焼きつくしてしまった。その直後に不名誉な噂が広まる。ネロは新しく都を建てなおし、それに自分の名前をつけようとの野心を日頃から抱いていたから、きっとネロがこの大火を命じたのにちがいない。民衆はこのようにささやきあい、その噂を信じて疑わなかった。

ネロは、この風評をもみけすための身代わりに「クリストゥス信奉者」を大火の犯人に仕立て上げる。そして、キリスト教徒の凄惨な弾圧が開始されることになる。「実におびただしい人が、放火の罪というよりむしろ人類敵視の罪と結びつけられたのである。彼らは殺されると

き、なぶりものにされた。すなわち、野獣の毛皮をかぶされ、犬に噛み裂かれて倒れる。[あるいは十字架に縛りつけられ、あるいは燃えやすく瀝青を塗られ、]そして日が落ちてから夜の灯火代わりに燃やされたのである。』⁵⁾

タキトゥスは、この迫害の主因がキリスト者の日頃からの忌まわしい行為 (flagitia) と人類憎悪 (odium generis humani) の罪にあるとの世間一般の見方にしがっている。キリスト者は、陰謀・魔術・食人肉・近親相姦に耽り、ローマ人の伝統と社会秩序に敵対する不穏な連中だと見られていたからである⁶⁾。

これらは、信者間の兄弟姉妹の呼びかけが不道德なものとして誤解され、集会やブドウ酒による聖体拝領が、魔術のための集まりや、嬰兒殺しと人肉嗜食などに歪められ邪推された結果であった。

しかし、キリスト教徒の信仰共同体は、異教からの改宗者に対して柔軟に開かれた集団であり、困難な状況にもかかわらずあらゆる社会階層からの絶え間ない信者の参加によって発展を続けていった。教徒の大多数は、貧民であり低い社会階層の人々であった。彼らは、人口の密集したローマの中心部ではなく、テヴェレ川流域の物資の輸送による商業活動の盛んな地区や人や物資の出入口にあたるアッピア街道の始まる市の周縁部に多く居住していた。兵士や奴隷たちのなかにも多くのキリスト教徒がいたといわれる。

もちろん、ローマのキリスト教徒のなかには裕福な人々や権力者も含まれていた。1世紀末には、皇帝ドミティアヌスの従兄弟のフラヴィウス・クレメンスとその妻ドミティラが、キリスト教徒であることを理由に逮捕された。そしてクレメンスは処刑され、ドミティラはパンダテリア島に流刑になり、そこで生涯を終えた⁷⁾。これら社会的、経済的に恵まれた社会階層の教徒たちは、信仰共同体の組織化のために財政的手段を提供した。また彼らは、礼拝、聖体拝領、洗礼、宗教教育、貧者の援助などの集会のためにその邸宅を提供した。そのようなキリスト教徒の拠点となっている場所はティトゥルス (titulus) と呼ばれ、4世紀末にはその数は25カ所にも達する⁸⁾。

このティトゥルスは現在の教区に類似した信仰共同体のセンターである。それは建物の所有者の名称で呼ばれていた。やがて時代が下って、かつてのその場所に荘厳な聖堂が建立されるようになると、いつしかその名前が聖人や殉教者の名前と混同され始める。例えば、Sabina, Balbina, Cecilia, Anastasia, Grisogno, Eusebio, Pudenteなどがそうだと考えられている。

ローマを七つの教区に分けて教会の組織化をはかったのは法王ファビヤヌス (236-50) である。ローマのキリスト教徒の数が増加し、教会の組織化がもはやさけて通れぬ問題となっていたからである。彼は、各教区に司祭を配置し、彼らにそれぞれの文化的、教理問答的、慈善的活動の監督を委ねた。その活動の中の一つに各教区に与えられた市城壁外の埋葬地の管理の問題があった⁹⁾。

ローマの初期キリスト教徒の墓地の発展の推移は、ほぼ三つの段階に分けられる。紀元1、2世紀の間は、キリスト教徒はローマ周辺にある異教徒たちの共同墓地に無名のまま埋葬された。ローマ市内における土葬は衛生上の理由から禁止されており、遺体は城壁外に埋葬される

ことになっていたからである。

紀元2世紀末にキリスト教徒だけの地下墓地が現れる。都市の人口増加にともない従来の一般共同墓地 (necropoli) が手狭になったことによる。伝統的な火葬から土葬への埋葬様式の変化もその原因の一つになっていた。その結果、カタコンベが生まれる。それはローマ市街からあまり遠方でない所に一定の場所が選ばれ、その地下を掘り下げて、その地下通路に地下埋葬室 (ipogeo) を設けるものであった。これは、ほとんど費用を要しないことから、特に経済的に恵まれない社会底辺の信徒たちから歓迎され、めざましい発展をとげる。その典型をサン・カッリスト、ドミティッラ、プリシッラのカタコンベに見ることができる。

コンスタンティヌス帝のミラノ勅令 (313年) によるキリスト教の認可は、多くの改宗者を生み出した。そのことが、カタコンベの発展に一つの転機をもたらすことになる。信者たちによる殉教者信仰が始まるからである。彼らは、殉教した聖人の遺体の近くに埋葬されることを熱望するようになり、その風潮は一般化した。そしてサン・カッリストのカタコンベに見られるように、墓地としての地下通路が聖遺物を中心にして4層にも5層にも網の目状に張りめぐらされることになる。

地下通路のどの部分に埋葬されるかは社会階層によって異なっている。特権階級や聖職者たちは外部に開かれた明り取りのある場所に埋葬されている。豪華に装飾のほどこされたその埋葬室 (cubiculum) は、壁面に彫り込まれたアーチ形屋根つき墓地 (arcosolia) をもち、浮き彫り装飾の石棺 (sarcofago) が置かれていたりする。これらは、聖人の墓所に近い場所にあるのが一般的である。

貧しい信徒たちは、地下通路の網の目のもっとも周縁部に葬られた。その墓は、狭い地下通路の両側の壁面にかいこ棚状に掘られた長方形の粗末な穴である。それは壁龕墓所 (loculus) と呼ばれた。遺体がそこに安置されると大理石の板、ないしは煉瓦でその壁面は石灰を用いて封じられた。

カタコンベは、5世紀末になると放棄され始める。それは、聖人や殉教者の墓が市内の大聖堂の内部に移されるようになったことによる。サン・カッリストのカタコンベに眠る殉教者で音楽の守護聖人でもある聖女サンタ・チェチリアもトラステヴェレ聖堂に移された。このような変化から新しい埋葬の方法が出現する。その結果、市内の大聖堂に移された聖人たちの近くに一般の埋葬の場所が移動することになった。そして、いつしかカタコンベの存在そのものが忘れ去られてしまうことになる。

II カタコンベの発見と初期の象徴美術

1. サン・カッリストのカタコンベとその図像

ローマ時代の大きな舗石の残る旧アッピア街道 [図2] に沿って初期キリスト教徒たちの最も古いサン・カッリストのカタコンベがある。その起源は聖女サンタ・チェチリアの祖先チェチリ家一族の墓所に始まる。サン・カッリストの名称は、法王ゼフィリヌス (199-217) の下

でこの墓地の管理にあたっていた司祭カリストの名前に由来する。奴隷出身のこの司祭は、後に法王カリストゥス一世（217-22）となり、このカタコンベを現在の規模に拡張した。そこには16人の法王と50人の殉教者が埋葬されており、一般信者は約10万人が葬られているといわれる。地下5層におよぶ地下通路〔図3〕の全長は20キロを超えるとされている。

このカタコンベの発見は、ジョヴァンニ・バッティスタ・ロッシによって偶然なことから1849年に行われた。ぶどう園を散歩していたロッシが、法王コルネリウス（251-53）の墓碑銘の断片を拾ったのが発見の発端となった。その断片に刻まれていた文字からこの場所の地区名が確定され、それが発掘に結びつくことになったのである。そのぶどう園は、直ちに法王ピウス九世（1846-1878）によって買い上げられた。そして法王庁による考古学的発掘と調査が開始されることになる。

1854年にこのカタコンベの中心をなす「法王たちの地下礼拝堂」（Cripta dei papi）〔図4〕が発見された。そこには、紀元230年から283年までその地位にあった9名の法王が埋葬されていた。ポンティアヌス（230-35）、アンテルス（236）、ファビアヌス（236-50）、ルキウス一世（253-54）、ステファヌス一世（254-57）、シクストゥス二世（257-58）、ディオニシウス（259-68）、フェリクス一世（269-74）、エウティキアヌス（275-83）の法王たちである。そのそばには、アフリカからローマへの旅の途中で亡くなった3名の司教が眠っている。この地下礼拝堂は、長方形で天窓から採光され、壁面に壁内墓所のための壁龕が作られている。

法王たちのクリプタに隣接した「5人の聖人の埋葬室」（Cubicolo dei 5 santi）〔図5〕には、「祈る人」の図像が描かれている。花の咲き乱れる庭園での6人の人物の祈りのポーズは、苦しく厳しい現世を離れてようやく安住の住処を見いだしたことへの感謝を神に捧げているように見える。庭園は永遠の幸せのシンボルである。それはギリシア語のパラディソスに由来する楽園のイメージからとられている。

「秘蹟の埋葬室」（cubicolo dei Sacramenti）の「聖餐」（Banchetto eucaristico）〔図6〕は、単純な葬式の食卓のようにも見える。7人の人物が一つのテーブルを囲んでいる。その左右にパンで満たされたパンかごがたくさん並んでいる。多くの人々の飢えを癒したイエスの奇跡の話から、このパンかごにはシンボリックな意味がこめられているように見える。永遠の不死のための糧としてパンが死者に供えられているのかも知れない。

「ルチーナの地下礼拝堂」（Cripta di Lucina）には、「よき羊飼い」（Buon Pastore）〔図7〕がある。それは、後に広く流布することになるバチカン博物館の「よき羊飼い」〔図8〕に代表される図像的イメージの原型の一つと見ることができる。

2. プリシッラのカタコンベにおける聖書的世界のイメージ

このカタコンベの名称は、元老院議員アチリ（Acili）家の娘プリシッラ（Priscilla）の名前に由来する。それは、ローマ市の北西のサラリア街道沿いにある。プリシッラの構造は、地下2層からなる。その第1層の地下墓地（ipogeo）にAcili家の文字が刻みこまれている。キリス

ト教徒たちが、3世紀の初め頃にセメントの原料の採掘場跡の地下道を墓地に利用したのがこのカタコンベの始まりだといわれる。

このカタコンベの中で最も古くその中心をなしているのが、アチリ家の墓所である。それは「ギリシア礼拝堂」(Cappella greca) [図9] と呼ばれ、2世紀に建造されたものとされている。ギリシア礼拝堂は長方形の部屋として作られているが、天井部分の真ん中にある大きなアーチが、その空間を二分している。天井に書かれているギリシア文字からギリシア礼拝堂の名称が生まれた。

この礼拝堂には、聖書の中のエピソードに取材した多くの場面がシンボリックな図像として壁画に描かれている。その主なものとして、ローマ教会の誕生を象徴すると思われる「博士たちの来訪」(マタイ, 2)、強い信仰のシンボルとしての「燃えるかまどに投げ込まれる3人のユダヤ人」(ダニエル, 3, 15-24)、洗礼の予兆である「岩から水を湧きださせるモーゼ」(出エジプト, 17, 6)、悔悛のシンボルとしての「中風の人の回復」(マタイ, 9, 2, マルコ, 2, 2, ルカ, 5, 18)、迫害や災いにおける神への信頼をテーマとする、不実な老人たちの策略による疑いを晴らし、神に感謝を捧げるスザンナとダニエルの「スザンナの話」(ダニエル, 13) などが壁面を飾っている。その他に聖書の「ライオンの穴に投げ込まれたダニエル」(ダニエル, 14, 31)、「アブラハムの犠牲」(創世記, 22, 9-10)、「ラザロのよみがえり」(ヨハネ, 11, 43)、「最後の晩餐」などの場面が描かれている。

ギリシア礼拝堂の一隅に、3世紀頃に作られた一人の女の死者を葬る「ヴェラーティオの埋葬室」(cubicolo della Velatio) がある。その名称は、壁面のフレスコ画に描かれた着衣の女性像から、このように呼ばれるようになった。そこに埋葬されている女の生涯を描いたそのフレスコ画には、死者である女の主人公が両手を上げてく祈る人>として中心に配置されている[図10]。その左側では一人の司祭がその女主人公に対して婚礼の儀式を行い祝福を与えている。また彼女の近くにいる若者は、花嫁である女主人公に対してしきたりの婚礼のヴェール(flammeum)を与えている。花嫁の手には配偶者の取決めについて書かれた結婚の契約書(tabula nuptialis)が握られている。右側には、今や母親となり、腕に赤ん坊を抱いた女主人公が描かれている。これはイエスを抱くマリアの聖母子像でもあるとの説もある¹⁰⁾ [図11]。

その同じ壁面に初期の「聖母子」像に属すると考えられるかなり破損の進行した聖母マリアと幼児イエスの表現が見られる[図12]。預言者バラムによって祝福を授けられる聖母子像だとされている。

これと隣り合って「燃えるかまどの中の3人の少年」[図13] がある。それが揺らぎない信仰と深い神慮のシンボル化された図像であることについてはすでに触れた。また上述したスザンナは、まさに「祈る人」として表現されている。スザンナは、彼女を誘惑しようとして失敗した二人の老人の偽証によって偽りの姦通罪で告発される。ダニエルの知恵と思慮深い裁きのおかげで困難から救われたスザンナは、深い感謝を神に捧げる。その表現は、後の「祈る人」のイメージの原型となった[図14]。

ブリシッラのカタコンベには、法王たちの墓所もある。マルケリヌス(296-304)、マルケル

スー一世 (308-309)、シルヴェステル一世 (314-355)、リベリウス (352-366)、シリキウス (384-399)、ケレスティヌス一世 (422-432)、ヴィギリウス (537-555) の、歴代の約300年にわたる7人の法王たちが、そこには眠っている。

Ⅲ 図像における異教的テーマとキリスト教的解釈

ヴィア・ラティーナのカタコンベは1955年に工事中の現場から偶然に発見された。ラティーナ通りにあることからこのように呼ばれる。その特徴の一つは、これがキリスト教徒の信仰共同体全般のためにではなく、ごく限られた数家族のための内輪で個人的な性格をもつカタコンベである点だ。3世紀に作られたとされる。法王庁の研究所の専門家たちによって現在もその調査分析が進行中だ。

その内部には壁面を飾る12枚のフレスコ画がある。そのテーマのいくつかは明らかにギリシア・ローマの異教的なものに取材されている。しかし、それにもかかわらずその主題に対するキリスト教的解釈は、特色ある図像的世界を創りだしている。聖書の中の情景についてのイメージも独特の表現によって描きだされている。例えば、禁断の木の実を食べたために「二人の目はひらけ、自分たちが裸でいるのが分かったので、いちじくの葉を縫い合わせて腰巻きにした」（創世記, 3, 7, バルバロ訳）はずの＜アダムとエバ＞〔図15〕は、斑点のある豹の毛皮を身にまとして岩に腰をおろし、悲しみの様子をして手で顔をおおっている。その右側には、直立して主への供え物の子羊を捧げ持つアベルと穂の束を捧げるカイン（創世記, 4, 3-4）が描かれている。その二人はローマ人風の服装をしている。

ソドムの滅亡をテーマとするフレスコ画でも、ローマ人風のトーガを羽織ったロトが、ダルマティカと呼ばれるT字型の白い貫頭衣の二人の娘の手をとって町から逃げだそうとしている〔図16〕。右には炎につつまれた町が見え、彼らの正面には塩の柱に変わってしまったロトの妻がいる（創世記, 19, 15-26.）。

墓所の奥のルネッタにあるのは、ヤコブに率いられた70人のユダヤ人がエジプトへ下る図である〔図17〕。右にエジプトの高い城門と町があり、下辺には豊かなナイル川とその流れのなかを泳ぐ多くの魚たちが描かれている（創世記, 46, 5-27.）。魚がキリスト教徒のシンボルであることはすでに述べた通りだ。

「ヤコブの夢」〔図18〕は、聖書の言葉がそのまま絵にされている。石を枕に身を横たえたヤコブは夢をみる。「地に立てられた一つのはしごが、天にまで達していて、神の使いたちがそれを上ったり下ったりしていた。突如、主が彼の前に現れて、こう仰せられた、『私はお前の父アブラハムの神、イサクの神なる主である。おまえがいまよこたわっているその地を、おまえとその子孫とに与えよう。おまえの子孫は、地のちりのようにふえて、西と東、北と南にひろがるだろう。地のすべての民は、おまえとその子孫とによって祝福されるだろう。』」（創世記, 28, 11-14, バルバロ訳）。

有名な「イサクの犠牲」〔図19〕は、二コマからなる絵解き絵のように描かれている。神は

アブラハムを試みようとして仰せられた。「おまえの子、おまえの愛している一人子のイサクを連れて、モリアの地に行き、私がおまえに示す山の上でその子をいけにえとしてささげよ」（創世記、22, 2, バルバロ訳）。そして、わが子をいけにえに供えるまさにその瞬間に、天からの神の声により振り上げられたアブラハムの剣をもつ手は制止される。上部に描かれているのはその瞬時の場面だ。下辺には、ロバの傍らで言いつけられた通りに忠実に主人の帰りを待つ奴隷が描かれている。

新約聖書の場面も登場する。ルネッタを飾る「ラザロのよみがえり」（ヨハネ、11）〔図20〕は、中心に髭のないイエスが描かれている。イエスは手に長い笞をもち、およそ7ないし80人の人々に取り囲まれながら、ラザロの墓の前に立っている。その墓は、ローマ風の異教的な小神殿であり、階段のある小高い所に建てられている。

興味をひくのはそのフレスコ画の上部左側に小さく描かれた人物像である。それはモーゼが律法の石版を受け取る場面である。「おまえは、山に登ってきて、私のところにとどまれ。私は、民に教えるために、私の書いた石の板の律法とおきてをおまえに渡す」（出ジプト、24, 12）と主がモーゼに言われた、その場面のイメージである。そして、その右には「昼は、雲の柱のような形に現れて道を教え、夜は火の柱のような姿で彼らを照らされた」（出エジプト、13, 21）導きとしての主の火の柱が描かれている。このフレスコ画において、初めて新約と旧約が同じ画面に関連づけられて描かれることになった。それが一般化するのは中世以降のことである。

「ロバにのったバラムと剣をもった天使」〔図21〕も旧約の物語がそのまま壁面に表現されている。「バラムが出かけたので、主は怒りに燃えて天使を送って彼の道中を妨げようと道に待ち伏せさせた。バラムは雌ロバにまたがり、二人の下男を従えていた。天使が抜き身の剣をもって待ち伏せているのを見た雌ロバは道をそれ畑の中に入った」（民数記、22, 22-23, バルバロ訳）。フレスコ画では左側にロバにまたがったバラムがおり、右側に振り上げた右手に短剣を握った髭のある天使がいる。真ん中の木が二人の人物を左右に分かっている。

「ペリシテ人を殺したサムソン」〔図22〕においても、旧約の話の内容が視覚的にそのまま描き出されている。凱歌をあげるペリシテ人たちの手に、縛り上げられたまま渡されたサムソンに、突如、主の霊が下った。「彼の腕にかかっていた綱は火に焼けた麻糸のように切れ、なわめはその手の中でとけたように見えた。近くに死んだばかりのろばのあご骨があるのを見つけた彼は、それを振り上げて千人を打ち殺した。サムソンはそのとき言った、『ろばのあご骨であいつらをやっけた。ろばのあご骨で千人もやっけた』」（士師記、15, 14-15, バルバロ訳）。画面の真ん中にいるのがサムソンである。右手にもっているろばのあご骨から彼だと識別できる。左側ではペリシテ人たちが打ち殺され、逃げまどっている。右側には、後にそこでサムソンが死を迎える神殿が描かれている。

新約聖書からとられた「サマリアの女との＜生きる水＞についての問答」もフレスコ画のテーマとされている〔図23〕。イエスは、旅に疲れて、井戸の傍らに腰を下ろしておられた。「サマリアの一人の女が水を汲みに来た。イエスは、『水を飲ませてください』と言われた。弟子たちは、食べ物を買いに町に行っていたのである。すると、サマリアの女は言った。『ユ

ダヤ人のあなたが、サマリアの女の私に、どうして水を飲ませてくれとおっしゃるのですか」。ユダヤ人は、サマリア人と交際していないからである」（ヨハネ、4, 6-9. フランシスコ会訳）。これは、イエスの「永遠に渴くことのない水」が話題となる直前のよく知られている重要な場面だ。釣瓶のある井戸を真ん中にしてサマリアの女とイエスが会話を交わしている。イエスは、髭のない若い青年として描かれている。

この墓所に葬られている死者をテーマにしていると思われるのが、「医学の講義」のフレスコ画である〔図24〕。さまざまな年齢からなる男たちの集団が、布のカバーのあるベンチに腰掛けている。そのベンチの前の地面には裸体の男が横たわっている。集団の真ん中には髭を生やした年配の男性がいる。その人物は、左側に顔を向けながら右手で下方を指し示している。その男性の左側にいる男性たちの一人が、細長い一本の棒を前に突き出して横たわっている男の腹部に触っている。

この場面については多くの議論がある。ある人々は、復活あるいは奇蹟的平癒を描いたものと考えている。またある人々は、天使に囲まれながら神による最初の人間の創造が行われている場面だと考える。さらに、人によっては弟子たちに囲まれたアリストテレスだとする見方もある。

しかし今日では、それはこの埋葬室に葬られている故人の生前の職業をテーマとするものだとする説がもっとも有力である。それによると、これは医学の講義の場面であって、故人は同僚や弟子たちに囲まれた真ん中の人物だろうと考えられている¹¹⁾。

ヴィア・ラティーナのカタコンベでもっとも注目されるのは、異教的なテーマがキリスト教的な精神によって描かれているフレスコ画の存在である。そこでは、ギリシア神話における英雄が救世主として登場し、人間にとって信仰のもつ意味が問われている。奥まった埋葬室のルネットの主題は「アルケステイス」伝説〔図25〕である。夫アドメトスの身代わりとなって自分が死ぬことを申し出るアルケステイスが左側に立っている。その右側に立つのは死者の国ハーデスからアルケステイスを連れ戻すヘラクレスの姿である。アルケステイスはヴェールで顔を覆われている。英雄ヘラクレスの肩には冥府の番犬ケルベロスがしがみついている。右端にはアドメトスが槍をもって座っている。この壁画の基本テーマは死者のよみがえりである。

正面のルネットに向かって右の墓所の壁面には「ヘスペリスの園の黄金の林檎とヘラクレス」〔図26〕が描かれている。髭のない若者として表現されているヘラクレスは、こん棒を岩に立てかけ、獅子の毛皮を左肩に掛けている。左側には禁断の木に巻きついた一匹の蛇が首を垂れている。原罪を暗示する蛇は、ヘラクレスによって退治されたのだ。

ルネットの右側の墓所は「九頭の大蛇ヒュドラを退治するヘラクレス」〔図27〕で飾られている。髭をたくわえた裸体のヘラクレスはすでに壮年であり、力強く信仰の敵を成敗している。

これらは、まさにギリシア神話の残像をもののみごとに換骨奪胎したキリスト教的信仰の表出であったといえるだろう。

むすび

カタコンベの壁面を飾る図像はどれをとってもきわめて稚拙で素朴な作品である。しかしそれらは、なにかを真剣に語りかけ訴えようとしているように見える。そこに描かれている図像は、礼拝の対象を、単に心のなかにおいてでだけでなく感覚的、視覚的にも明らかにしようとする人間の根源的な気持ちの表現されたものだと考えられる。また、その図像を生み出したエネルギーは、死者たちの眠る空間を見た目に美しく飾ろうとする人間本来の美的な欲求に根ざしていたと思われる。カタコンベのフレスコ画のテーマとイメージは、その多くが聖書の内容から創りだされている。初期キリスト教徒たちは、当時の信仰共同体の礼拝と聖書理解にもとづきながら、彼らの抱くイメージを神の超自然的な栄光を象徴的に表現する作品へと結晶させたのであった。

「聖母マリア」「聖母子」「祈る人」「よき羊飼い」などは、ひたむきな信仰のなかから形象化されたキリスト教美術の源初的形態におけるイメージである。そして、われわれの誰もがカタコンベの壁画の前に立つときに理屈抜きに実感させられるのは、胸に滲みとおる通奏低音としての敬虔なる<祈り>の響きである。まさに宗教が自ずから自然のうちに芸術を生み出したのだ。

しかし、残念ながら、カタコンベの美術作品に対する美術史的な観点からの究明は、いまだに皆無に等しい。カタコンベに秘められている多くの秘密が、考古学的、宗教史的研究とともに美術史的に解明される日の一日も早く訪れることを期待したい。

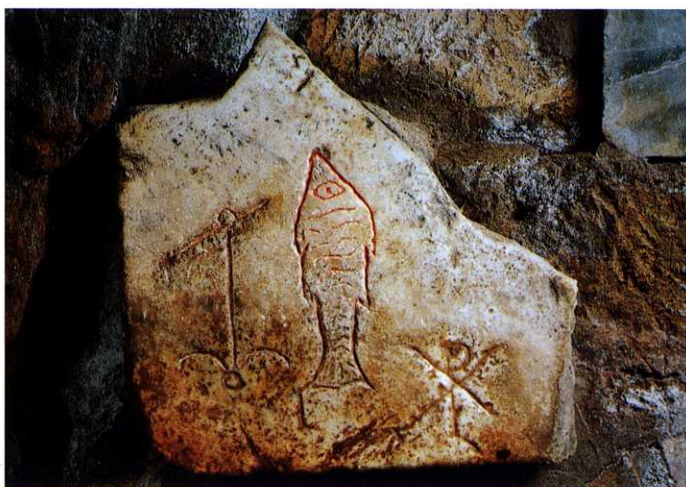
注

- 1) 矢崎美盛「アヴェマリアー マリアの美術」(岩波書店、1963) p.30.
- 2) IL MONDO DELLA BIBBIA, N.2 - MARZO-APRILE 1994, Elle Di Ci.
“ROMA - Genesi della Chiesa - ”のテーマのもとに “La verità sulle persecuzioni” と “L'enigma delle catacombe” が特集されている。
- 3) 鈴木宣明「ローマ教皇史」(教育社、1980), p.25.
- 4) フェデリコ・バルバロ訳「聖書 旧約 新約」(講談社、1992)、「パウロの手紙解説」、p.230.
- 5) タキトゥス「年代記 ーティベリウス帝からネロ帝へー」下 (国原吉之助訳 岩波文庫、1981) 第15巻38-44、pp.264-276.
- 6) 秀村欣二「ローマ皇帝支配の意識構造」岩波講座「世界歴史3」(岩波書店、1970)、p.58.
- 7) 同書、p.60.
- 8) Mancinelli, F., Le catacombe romane e l'origine del Cristianesimo, Scala, 1981, p.6.
- 9) 前掲書「ローマ教皇史」、p.37.
- 10) 前掲書 Le catacombe romane, p.29.
- 11) 同書、p.35.



〔図1 a〕
ブリッラのカタコンベ
魚と錨

〔図1 b〕
ドミティッラのカタコンベ
女の故人アントニアに
捧げられた十字架のシンボルの
錨とキリストをしめす魚



〔図1 c〕
サン・セバスティアーノの
カタコンベ
魚とキリストの頭文字（ギリシア文
字）のXPの組み合わせと錨



〔図2〕
ローマ時代の舗石がそのまま残された Via Appia



〔図3〕
サン・カッリスト
地下通路とその両側壁に
掘られた墓所



〔図4〕
サン・カッリスト
「法王たちの礼拝堂」



〔図5〕
サン・カッリスト
「祈る人」



〔図6〕
サン・カッリスト
「最後の晩餐」



〔図7〕
サン・カッリスト
「よき羊飼い」



〔図8〕
バチカン、
Pio Cristiano 博物館
「よき羊飼い」



〔図9〕
ブリッシラ
「ギリシア礼拝堂」

〔図10〕
ブリッシラ
「祈る人」



〔図11〕
ブリッシラ
「赤ん坊を抱く故人」

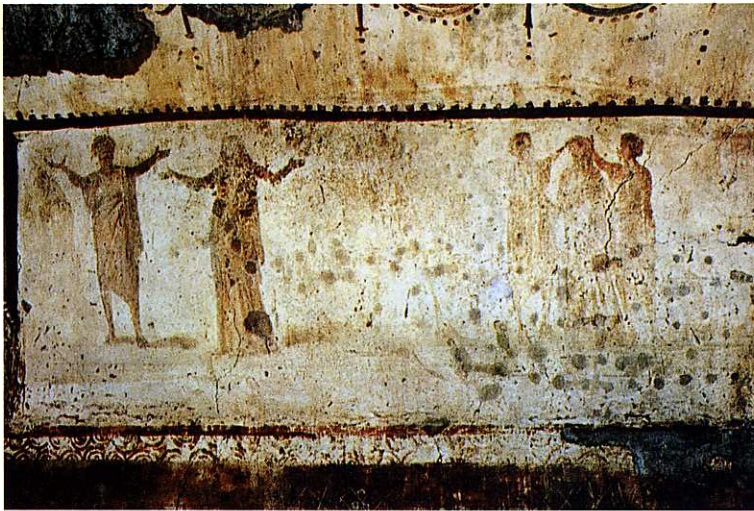


〔図12〕
ブリッシラ
「聖母子」像





【図13】
ブリッシラ
「炎のなかに投げ込まれた
三人の少年たち」



【図14】
ブリッシラ
スザンナの「祈る人」

【図15】
ヴィア・ラティーナ
「アダムとエヴァ」



【図16】
ヴィア・ラティーナ
「ロトのソドムからの脱出」





〔図17〕
ヴィア・ラティーナ
「ヤコブのエジプト入場」



〔図18〕
ヴィア・ラティーナ
「ヤコブの夢」



〔図19〕
ヴィア・ラティーナ
「イサクの犠牲」



〔図20〕
ヴィア・ラティーナ
「ラザロのよみがえり」



〔図21〕
ヴィア・ラティーナ
「ロバにのったバラムと剣をもった天使」



〔図22〕
ヴィア・ラティーナ
「ペリシテ人を殺したサムソン」



〔図23〕
ヴィア・ラティーナ
「井戸の傍らのイエスとサマリアの女」



〔図24〕
ヴィア・ラティーナ
「医学の講義」



[図25]
ヴィア・ラティーナ
「アルケステイス」伝説

[図26]
ヴィア・ラティーナ
「こん棒をもつヘラクレス」



[図27]
ヴィア・ラティーナ
「ヒュドラを退治するヘラクレス」

